

〔研究ノート〕

「文化理論」のグリッド概念を読み直す

高 橋 克 紀

目次

- 1 はじめに
- 2 ダグラスとウィルダフスキーの問題意識
- 3 フッドの分析
- 4 南島の応用
- 5 ダグラスに戻って
- 6 まとめと示唆

1 はじめに

価値判断の分かれる政策だけでなく、行政の在り方を考えるうえでも、人々に文化の差異がなぜどのように生じるのかという関心は避け難い。ある文化を生じる社会の背景的要因を探るアプローチとして、「グリッド・グループ分析」が行政学でも一時は取り上げられ、今でも知られてはいるが、立ち入った議論はほとんどなされていない。そもそも「グリッド」というキー概念からわかりにくい。

グリッドとは、おおまかにいうと、各人の行動に対する規範的な指示であり、社会集団によってそれは多かったり少なかったり（あるいは強かったり弱かったり）する。これとは別に、個人の行動は、帰属集団が忠誠をどれくらい求めるか、すなわち内外の境界づけの明確さという大きな要因があり、こちらは「グループ」と呼ばれている。この二つを縦と横の二軸に組み合わせて、社会集団がよしとする「生き方（way of life）」を四通りに類型化したものが「グリッド・グループ分析」として知られている。それが図表 1 である。これは「文化理論（cultural

theory)」とも呼ばれる。

図表1 グリッド・グループ分析の基本型

		Group	
		-	+
Grid	+	Fatalist (運命論)	Hierarchist (階統制・位階制)
	-	Individualist (個人主義)	Egalitarian/Sectarian (平等主義)

出典：Douglas（1970, 1982）, Wildavsky（1987）, 赤間（1999）を
合わせて筆者作成。

この表には、成員の行動を制約するくせに集団がはっきりしないとか、メンバーシップは明確なのに各自の行動は制約されないといった、常識的には想像しづらいタイプの社会集団も存在し、運命論やらセクトやらとなじみの薄い名前もついている。平等主義とセクトが同じことであるというのも当惑の素である。

加えて、この四つに分ける全体をなんと呼ぶとわかりやすいのかにもいささか悩まされる。ここまで「社会集団」と書いたのはダグラスの訳書に従ったのだが、分析軸の一つが「(境界の明確な) 集団」であるから望ましくはない。どの文献でもその定義は書かれていないので、あまり神経質にならず、ある集団を成り立たせている一定のまとまりが四つに分類できるというくらいの意味に受け止め、分類される全体を「社会組織」や「集団組織」と呼ぶことにする¹⁾。そのため、某省や某協会のような組織実体のことは「組織体」と記し、組織＝秩序の含意とは区別する²⁾。

“グリッドもグループも高程度の社会組織”がヒエラルキー型であり、この社会組織に属する人々は、世界を階級的秩序で捉えており、階級を乱すことは世界全体を混乱させるかのように捉える。また、低グリッド・高グループの社会組織

1) 原語では文献によって、social organization, group organization, social relation, social context などと書かれており、これらの定義は見られない。本稿では、“ヒエラルキー的な社会では…”というように、「社会」とだけ書いて日本語として違和感がない場合にはそう記すこともある。

2) 高グループな社会組織を団体、そうでないものを集団と呼べると社会的には便利なのだが、そうすると原典との用語の比較対象が困難になるので、ウェーバー的区別も避ける。

は成員の自律性と平等性を重視しており、それは自集団だけでなく世界全体がそうあるべきと考えられている。グリッド・グループ分析の「文化」は、単に習慣ということではなく、それが一定の正しい世界観・宇宙観の構成を含意している。

「グリッド・グループ分析」を用いる政治・行政学の先行研究は少なく、特に日本ではわずかしかなが、その背景的要因として、文化人類学者メアリ・ダグラスによるこの宗教社会的な分析が、その含意をあまり保てない形で政治学に展開されてきたことも指摘できよう。グリッド・グループ分析は、ダグラス自身とウィルダフスキーによる社会的リスク認識が、その十数年後にそれをさらに応用した行政学者フッドの社会管理方法を経由しているので、含意にずれが生じてくるのは避け難い。ダグラスとウィルダフスキーもこの分析がよく誤解されると述べており、当初のグリッド・グループ分析がよく呑み込めないままでは応用もうまくいかない。

日本での言及はフッドの行政学的応用を通したものが多し。伊藤（1999）は、ウィルダフスキーの関連文献にもよく目配りしたうえで詳しく紹介し、さらに積極的な応用が期待しづらことを指摘していた。西尾（2003）は霞が関の組織文化を考察する際のアプローチの一つとして文化理論を取り上げ、日本の官庁組織がヒエラルキー的というよりも（ボトムアップ志向の）平等主義的であることに注意を促していた。どちらもグリッド・グループ分析に積極的な意義を見出していたわけではなく、興味を示しつつも批判的なトーンは、フッドではなくウィルダフスキーらの意図に沿った政治文化論としての赤間（1999）による検討にも共通している³⁾。

しかし近年、政策評価論の研究者である南島（2020a, 2020b）が再びフッドを通して、合意形成に関わる積極的な応用を試みている。また、農学系の田中ほか（2018）は、住民合意形成の関心からグリッド・グループ分析の多様な派生形をレビューしている。たしかに合意形成過程には相互の下位文化的な食い違いに関心もたれるので、グリッド・グループ分析が再発見されることになるかもしれ

3) 伊藤（1999）も赤間（1999）も、文化理論に対する Selle（1991）の批判に沿っている。Selle の指摘はあまりに多いのだが、重要なのは、グリッドとグループの区別が有効ではないという批判にある。これに対する Wildavsky（1991）の反論は手短で、文化理論の意図がわかりやすく書かれている。

ない。

ところで筆者には、社会そのものの成り立ちという抽象的・理論的に対する関心が強く、社会理論を政策学に取り入れようと、特に政策実施論と社会理論の接点を扱ってきたのだが、ダグラスとウィルダフスキーの「文化理論」はうまく文脈に載らず、まだ検討を加えていなかった（拙稿 2024）。政策実施論への関心は南島も強く示しており、南島による応用は筆者にとってもよい導きとなりうるが、その用語・概念や説明方法が独特なので、その読解もまた容易には行かない。

本稿はダグラスとウィルダフスキーの共著書から始め、次にフッド、南島と今日に近づき、その後で 1970 年のダグラスに遡る。そうして、グリッドやグループがどのような概念であったのか、それが後の議論とどの程度異なっているのかを概観し、今後の活用にあたっての注意点を整理していきたい。

といっても概念史やダグラス研究のような厚みには到底届かない。本稿はダグラスの 1970 年の *Natural Symbols*（以下 NS と略記）、1982 年の *Essays on Sociology of Perception*（以下、ESP）の序文、同じく 1982 年のウィルダフスキーとの共著 *Risk and Culture*（以下、RC）、それに、ダグラスはいないがウィルダフスキーほか 3 人の 1990 年の共著 *Cultural Theory*（以下、CT）を主に検討していく。

2 ダグラスとウィルダフスキーの問題意識

RC は公害や消費者運動などが新しい科学技術の危険性に特化して大きく問題にするのはなぜかを探った、「リスク認識の文化理論」（RC：7）である。これは、ダグラスのグリッド・グループ分析を応用して、「共同体のコンセンサスがどのように自然界の危機と道徳的欠如と関係しているか」（p. 7）を明らかにする、新たな社会理論として提起された。

こういわれてもわかりづらいが、そうした社会運動のリスク認識は、科学技術が自然界にもたらす危機を、我々現代人の道徳的欠陥と直結させた理解に基づいていた。簡単にいえば、人間が物質的欲望を肥大させて科学技術を発達させ、精

4) 政策評価研究者の窪田（2021: 225）は、南島（2020a）の書評において、方法論的な曖昧さを指摘し、「先行研究による蓄積との関連が説明不足の場合が多」いとも述べている。

神性を軽んじているから、自然界全体を危機に陥れ、結局人間も生きていけなくなるという大変な危機を我々は迎えており、我々は世界観を根本的に変えなければいけない、という主張である。今日でいえば、ことに欧州でさかんな地球温暖化問題の危機意識が思い出されるが、半世紀前は米国でそうした政治運動が急速に高まっていた。個人の自由と経済的發展を尊重してきた米国では意外な運動であったと言える。

RCはその謎を解明しようとした。そうした集団には、凝集性は高いのに成員が自律的に行為することをよしとする特徴を見出している。彼らは集団内の役割や上下関係を嫌うため集団組織が不安定で、集団の結束を図るため未知のものが外部から侵入することに強く警戒する。そのため、新しい科学技術に由来する危険（交通事故などの日常的な危険ではなく）に強く反応して政治問題化したのである。しかも、この一見特異な集団の特性は、建国期のプロテスタント教会の教義に根差しており、米国の独特さを構成する要因であることを指摘している。

そのように、人々が正しいと捉えている世界観は、主な帰属集団が持つ二つの構造的要因によって決まる、とグリッド・グループ分析は考える。集団としての凝集性の程度（集団外部との明瞭な境界づけ）と、帰属集団による成員の行動に対する規制の程度、という二つの要因を組み合わせによって、人々が暗黙的に考える世界の正しい在り方の違いが説明できるという。

RCにはグリッド・グループ分析のまとまった説明や紹介はほとんどなく、あの2×2の表も出てこないのだが、用語は次のように定義されている。「グループ」とは、「人々が彼ら自身と外の世界の間に立てた外側の境界」のことで、「グリッド」とは、「人々が他者に対してどのように振舞うかを限定するのに用いられる、すべての社会的区別と権威」のことである（p.138）。つづいて、集団が取り囲み帰属を示す規制が多くかつ行為の方法に制約の多い「ヒエラルキー」の社会、個々人の交渉が最も大きく残され、効果的な集団境界も行動の制約もない「個人主義」の社会、共同体の成員をそれ以外と強く分離するが、「きわめて平等主義的（egalitarian）なのでリーダーもおらず、優先順位や人々にいかに振舞うべきかを指示する規則もないセクト的社會（sectarian society）」の三つを簡単に言及してから、「環境と新技術の危険を心配する公益に関心を持つ集団のいくつかを」この文化理論で分析できるとダグラスとウィルダフスキーは述べている（p.139）。簡単にいうと、そうした運動団体には規模が大きくヒエラルキー的な集団と小規

模で分裂的なセクト的集団があり、その比較分析にグリッド・グループ分析が有用だ、ということである。

RCでは低グループ・高グリッド（すなわち「運命論」）が扱われていないし、「ヒエラルキー」的社会ではグリッドの強さとグループの強さを区別しづらい。そこで、同年に刊行されたダグラス編のESPから、グリッド・グループの概念と四類型の表を確認してみよう。これによると、この分析は、まず社会生活における集団への忠誠に、ついで集団が個人の行動に加える規制（regulation）の程度に注目している。現代人なら多くの人が規制には反対して自由を好むだろうが（低グリッド・低グループ）、それでも、「軍隊的生活の伝統のなかで」幸せと安全（secure）を望む（高グリッド・高グループ）人も多くいるだろう（ESP：3）。

グループもグリッドも個人に対するコントロールの二つの次元であり、二つの次元を組み合わせると「四つの極端な社会生活のビジョン」が得られる（p.3）。これを図示したものが図表2である。

図表2 ダグラス（1982）の四類型

High grid	
Atomized subordinationn	Ascribed hierarchy
Individualism	Factionalism
Low grid	
Low group	High group

出典：ESP: 3, FIGURE 1 を一部変更。枠外の文字列の位置を少しずらし、各象限にあったアルファベット記号を削除した。

左下と右上の象限はわかりやすい。左下の低グループ・低グリッドな社会では、契約の交渉や提携関係で個人に選択余地が大きく、個人のもつ特典や影響力によって社会的地位の上昇や下降が起こりやすい（Individualism）。

以下、原文とは順番が変わるが、右上は、大規模な制度的環境で、忠誠であることが報われ位階の高さが尊敬されている。成員は組織に守られ、自分がどの位置にいるかわかっている（Ascribed hierarchy）。

右下（低グリッド・高グループ）は、集団の外部境界は明確だが（集団内の）すべ

5） 前者は group commitment, 後者は grid control と言い換えられている（ESP：3）。

での地位は曖昧で交渉に開かれている（Factionalism）。

左上（高グリッド・低グループ）では、個人がどう振舞うかが密接に環境に起因している（Atomized subordination）。複雑な集団では集団帰属の保護や特権が与えられていない場合もある。

以上は編者ダグラスの序文によるが、説明が短いためもありわかりづらい。そこで、約 10 年後の *CT* を見ていこう。高グリッド・低グループには「運命論（者）」というラベルが与えられ、歴史上の具体的な存在として、織物工場の未組織労働者が挙げられている。彼らは経営者に言われるままに労働するほかに、集団を形成していないので対抗能力に欠け、自らの人生を改善していく意欲をほとんど持っていない、とされる。行政学でよく紹介されてきたのはこのイメージである。

低グリッド・高グループのタイプ（social context）については、「内部の役割分化」に欠けた集団（*CT*: 6）、とコンパクトかつ的確に紹介され、さらに、グリッドという用語がとっつきにくいにしてもその意味内容はデュルケームの regulation と同じことなので社会科学にはおなじみの概念である、とまで述べられている。そこで、境界の明確な集団でも内部での規制が緩いという形態は（少なくとも理屈としては）我々にも想像できるだろう。

とはいえ *CT* は、デュルケームに言及した直後に、「社会統制（social control）の様式が、グリッド・グループ分析の焦点である」、「社会統制は権力の一つの形態である」、「グリッド・グループ分析における個人たちは、操作され、他者を操作しようとしている」と述べているので（p. 6）、グリッドが、成員同士をつなぐ仕組みの形式でもあるということよりも、成員に特定の行動を強制する指示（prescription）そのもの、つまり強制的・抑圧的な働きでしかなく見えてしまう。デュルケームは集団が一定の道徳的意味を共有することを重視していたので、規制が少ないほど望ましいかのように我々が連想するなら、それは大きな間違いとなる。

右上の「ヒエラルキー」型の具体例には（ヒンドゥー教の）カースト高位者を挙げている。彼は拘束力の強いヒエラルキーの上位にいる。しかし、村人を集合的に操作するために、個人的な理由で異なることのない（impersonal）、細かなルール（たとえば、食事、職業、婚姻、礼拝）に従う必要があり（p. 9）、それゆえグリッドは高い。

左下の「個人主義」の具体例には、たたきあげの工場経営者（self-made manufacturer）を挙げており、かなり癖の強い人物像で描かれている。彼は富裕な暮らしをめざし、一人の勝者だけが獲物を独占するような競争を勝ち抜こうとする、物質主義的で粗野な個人主義である。しかしこの競争はゼロサムではなく、他者が必要とするものを提供することで、経営者だけでなく彼の従業員もよい生活ができるようになる、とこの個人主義者は信じている（pp.7-8）。

ところで、CTには五つ目の類型として、「自律」という社会的存在（social beings）が追加されている。具体例は宗教的な隠遁者（hermit）で、強制的な社会的関与から意図的に撤退した自律的な生き方を実践するのだが、下層労働者のように強制されないためというだけでなく、自ら他者を操作する誘惑からも身を退いている。めざしているのは、落ち着いた、誰にも借りのない自足的な暮らしであり、仕事を持った人には困難だが不可能ではないという（p.8）。

この類型は、他の論者にはほとんど使われておらず、フッドの分析も「自律（隠遁者）」を除いた四類型に戻しているので、本稿もこれ以上は触れない。視覚化するならば前掲の図表1の中央部に「自律」ゾーンを加えればよい。

我々はつい四分類（図表1のような）にどの具体例を割り当てようかと気を取られるのだが、個人に加えられる社会的コントロールには、集団性の強さとは独立した要因があり、それが、個人が他者の行動を規制する程度（グリッド）である。グリッドとは他者を操作したり、操作されたりする程度のことで、CTでは集団組織の内外で作用する権力（影響力）と同様に捉えられていた。CTの具体例には疑問の余地もあるが、それは本質的な問題というよりは何を挙げるとよいか（比喩として成功するか）という問題にすぎず⁶⁾、ここでは立ち入らないことにする。

それよりも、注意が必要なのは、グリッドもグループも“少ないほどよい”わ

6) たとえば、小さな工場で働く未組織の職工が高グリッドなのは、CTによれば経営者への集合的な対抗可能性を欠いているからであった。しかし経営者のグリッドが低いのは関与する人間が実質的には少ないからとされており、経営者は孤立的なほどグリッドが低く、従業員は孤立的なほどグリッドが高いことになる。集合的な対抗可能性までグリッド概念は含意できるのだろうか。また、カースト上位者が自らの支配力（下層民への操作能力）を維持するために行動を規制するなら、そこには選択の余地がある。ただし、仮にパラモンが下層民操作を意識することなく教義に忠実に行動しないと世界が崩壊すると信じているなら、CTの説明に収まりうる。

けではないことである。グリッドが高いと個人は不自由になるが、グリッドが低いと集団をまとめることが困難になる。人間は（程度の差は大きいものの）集団で暮らしており、現代の我々はそれを個々人の自由となるべく調和させたいと考えるのが一般的である。グリッド・グループ分析は、この集団と個人の相反する性質がどのような（壮大な）世界観を通して思い描かれているか、そしてそれがまた社会規範として成員をコントロールしているか、という相互作用関係を捉えようとしているのである。

とはいえ、ダグラスもウィルダフスキーも当時の環境運動の過激さに批判的であり、特にウィルダフスキーは、運動団体の「平等主義」的価値観と「個人主義」⁷⁾的価値観のバランスが崩れることを懸念していたので、集団の世界観（宇宙観）が具体的な行為規範をどのように支え、またそれが世界観を強化しているのか、といった観点は目立たなくなっている⁸⁾。

3 フッドの分析

90 年代後半、英国の行政学者クリストファー・フッドは、同時期の行政改革が民間経営・市場競争志向に大きく偏ることに警鐘を鳴らしていた。行政管理の研究が古くからのテーマや関心が単に目新しい言葉に置き換わったり捨て置かれたりして、行政の役割をめぐる本質的な議論がなされなくなっていることを強く批判した。*The Art of the State* (2000 [1998]) はウィルダフスキーらの「文化理論」を使って、行政学の今日の視野に多様性を取り戻そうとしている。「コントロールと規制 (regulation)」の方法が行政に期待される社会組織の構造によってどう異なるか、および、歴史的に推奨されてきた行政の多様な役割像を、「文化理論」を通した整理を展開した。

7) この指摘はよくなされており、伊藤（1999）にも言及がある。そのほかで重要なのはダグラス自身の回顧であろう（何度か書かれているが、さしあたり Douglas, 1996）。

8) 政治学と宗教社会学の違いとしてやむを得ないともいえるが、Spickard (1989) はダグラスが NS の第二版（1973）以後、関心がコスモロジーからコントロールに移ったと指摘している。筆者はこの批判はあたらないと思うしダグラスも受け入れていないが、Thompson (1982) による、4 類型の右上と左下のセットは manipulation を扱っており、左上と右下のセットとは概念の次元が異なる、との指摘は説得的である。

ここでは、「グリッド」は「我々の生活が、慣習やルールに囲まれて、個人の交渉に開かれた領域を「どれくらい」減少させている「かという」程度」のことであり、グループとは、「個人を集合体に縛りつけることで、個人の選択が集団の選択に「どれくらい」制約しているか「という」程度」のことである、とフッドは定義する (Hood, 2000: 8)。

ウィルダフスキーらと表現は少し違うが、次の例を見れば意味は同じであることがわかる。フッドが挙げる例では、高グリッドの集団組織では親が子供につけるべき名前はほぼ決まっているが、グリッドが低ければ親が好きな芸能タレントやスポーツ選手の名前をつけることができる。また、低グループの状態とは、個人が孤立していたり原子化されていたりして、乱雑な人間関係でしかなかったりするような暮らし方を想起すればよいという (p. 8)。

それぞれの社会組織では、行政に求められる価値も異なる。表右上の「ヒエラルキー」的な生き方 (The Hierarchist Way) では、その人間関係は結束しており (socially cohesive)、ルールに基づいた組織が思い描かれている。左下の「個人主義」的な暮らし方では、個人を個別化・孤立的 (atomized) に捉え、個人間の交渉・取引が重視し、組織はそうした交渉の場から成り立っている (と考えられている)。右下の「平等主義またはセクト的」な集団組織は成員同士の関係が平等で、意思決定に誰でも参加できることを重視する。最後に、「運命論」とされる左上の社会では、人々は明確な集団をつくらず、ルールに基づいて組織化されるものの成員間の協力は乏しい。彼らは対抗力が弱いために、事態を自ら変えていくという姿勢には欠け、運命に身を委ねるしかないという生き方になる (pp. 8-9)。

フッドはこれらに「public management」における四つの (一般的な) コントロール方法⁹⁾の特徴を指摘する。上記の順で挙げていくと (原文とは異なるが)、「ヒエラルキー」的コントロールの特徴は「oversight (監督)」と呼ばれており、これは「ボス支配」のイメージで理解すればよい。「個人主義」的な社会に対して

9) 行政に対するコントロールに絞ると文脈が合わなくなる。Hood (1996) は明らかに行政への統制を論じているが、本書の文脈では行政の社会管理も含まれている。我々の日常言語ではコントロールと規制を一般的には区別できないので、コントロールの含意を広めに受け取っておく。

は、個人の選択を重視し、「competition（競争）」を通したコントロールがなされる。

「平等主義（egalitarian）」では、ヒエラルキー的コントロールも運任せも許容されず、内部ではピア・レビュー的コントロールがなされる。階層なしに組織内を意思統一するためには同僚に成果を認めてもらわねばならず、このコントロールには重い集団のストレスがかかる（連帯責任もありうる）。外部に対しては、サービスの生産者と消費者という立場の区別をなくし、住民と職員（警察官や軍人など）の区別を最小化して、行政サービスを「co-product（共同生産，協働）」しようとする。「平等主義」の類型では、「平等主義の世界観および全般的な集団主義とゆるやかに提携した」(p.60) コントロール手法が用いられる。フッドはそれを「mutuality（相互性）」（によるコントロール）と名付けている。

最後に、「運命論」的な方法としては、抜き取り検査や抽選のような、ランダムに対象者を選択するという、「chancism（確率，運任せ）」のコントロールがある。ただしこれは運命論的な人生観と「ゆるやかに結びついた」程度の考え方なのであるが (p.65)，フッドはこれを「contrived randomness（計画的無作為¹⁰⁾）」と呼んでいる。

以上を簡単な表にしたものが図表3である¹¹⁾。前二者のコントロールは社会の世界観によく従っていたが、後二者はかろうじて接点を見出したような関連にとどまっているといえよう。

このほか、フッドは各領域の隣同士や斜め隣りで混在するコントロール手法を

図表3 フッドの応用的4 類型の簡略化

	Group -	Group +
Grid +	Contrived randomness 抜き取り検査，抽選等	Oversight 権限の階梯の設定 ボス支配的
Grid -	Competition 選択を重視し，内部で 交渉・取引する組織秩序	Mutuality 権限を平等に共有 集団主義のプロセス

出典：Hood（pp. 49-68）をもとに単純化して作成。

10) これは西尾（2003: 34）の訳出に従っている。
11) 原書の Table 3.1（Hood, 2000: 50）と内容面では同じことだが，2×2の表にし，記載内容も絞っている。

六つ挙げ、四角形の四辺と対角線に配置してみせている。たとえば、ヒエラルキー的コントロール (oversight) と市場競争的コントロール (competition) の「混合型 (hybrid)」を「準市場」、ピア・レビューとヒエラルキーの混合型¹²⁾を「Managed Peer Review」と呼んでいる (p. 235, pp. 239-240)。

このように、フッドの考察は、本来は多様である行政の社会管理の方策が（当時さかんな「public management」言説によって）いかに矮小化されているかを次々に提示しており、同書は画期的な（新たな）コントロール方法を開発・提唱しようというのではない。抽選などランダムな選択や、平等性・水平的組織と相性のいい手法に当時はそれなりに新鮮味があったにしても、それは理論化されていないだけでありふれた実践であるとフッド自身が述べていたし、そのつながりは「緩やか」でしかなく、しかも平等主義的コントロールは日本企業の集団主義同様なのである。日本でフッド経由の文化理論が盛り上がらなかったのも無理はないように思える。

4 南島の応用

南島には CT 関連で二つの論文があり、一つは 2007 年論文でのちに加筆修正されて単著書に収録されている (2020a)。もう一つは原発再稼働の事例に応用しようとしている (2020b)。

(1) 2020a

『政策評価の行政学』第 9 章は、フッドのコントロール論、ダグラスのグリッド・グループ分析、フッドの「文化理論」を紹介したあと日本の政策評価の実態を捉え、政策評価が何のために行われているのかを問い直している。評価研究の意義を政策（形成）に反映させるという目的に絞ったうえで、今日の日本の政策評価¹³⁾の捉え方の違いを、文化理論に倣って四つに整理する。

12) 企業や行政組織などで現に行われているピア・レビューが組織階層の中に組み込まれて、上司から部下へのコントロールの手段として用いられている。我々が経験的に思い浮かべるピア・レビューはたいていこのかたちであろう

13) 明示的ではないものの、政策評価を情報公開や住民とのコミュニケーションツールと捉える考え方には否定的である。

類型そのものは図表 1 と同様なので、なるべく簡略に（2020a: 181 以下）見ていこう。各タイプを取り上げる順番は南島に従って、まずヒエラルキー型（Hierarchist）はマネジメントの透明化を重視し、第三者の「監視」や、評価への信頼性を高めるための手続き拡充を重視する。南島はこのタイプ（の政策評価）を価値を「制度志向」と呼ぶ。

「個人主義」に該当する生き方は、経済合理性を重視し、効用の最大化と費用の最小化をめざす（競争）。政策評価については、アクターのミクロ的レベルでは節約・効率化がめざされており、そのやり方が個人主義的モードにあたる。これは「手法志向」と呼ばれる。

「平等主義」（低グリッド、高グループ）で目指される政策評価は、ボトムアップ的な目標設定や専門職的な合理性を重視している。マネジャーなしのマネジメントが志向されるほどであり、南島はこれを「成果志向」と名付けている。

最後は「運命論（者）」（高グリッド、低グループ）で、このタイプでは、評価の担い手たちは政策評価に意義を見出すことも期待を持つこともなく、ただ（仕事の）義務として、避けられぬ手続きとして評価業務を行っている。このタイプには「自己評価」というラベルが与えられている。

南島はこの四類型を件の図にしているのだが、項目も多くなっているのここに簡略化して載せておく。「」内はそれぞれの特徴を表すラベルである。

どのラベルも中身を推測し難い。この分類は、政策評価の実務的担い手や論者による捉え方を整理したものとしてされているのだが、その呼称のせいで読み手が混乱しないように、¹⁵⁾まず表面的な修正を加えてみたい。最も目立つ「自己評価」から、図表 4 を左上から右回りに取り上げていく。

「自己評価」といえば通常は積極的・自己改善的な語彙であり、運命に服従する消極的な姿勢とは相容れない。反映先もない評価業務を嫌々片付けているようなので、特に価値観はないだろう。庁舎で実際に語られるネガティブな「自己評

14) 正確にいうと、「タイプ」というのは筆者の表現で、南島は（フッドに従って）「モード」と記している。

15) 字面を論うようで気が引けるが、それなりの理由がある。田中ほか（2018）によるグリッド・グループ分析応用のレビュー論文は諸文献の 4 象限の捉え方を一覧表にしておき、南島論文はこの四つのラベルで表面的に紹介されており（web 公開されている）、それでは南島が気の毒になるほど意味不明になっている。

図表 4 南島の四種型

		グループ	
		低	高
グリッド	高	運命論 「自己評価」	ヒエラルキー 「制度志向」
	低	個人主義 「手法志向」	平等主義 「成果志向」

出典：南島（2020a）をもとに単純化して作成。

価」のことなのではあろうが、日常語と乖離しているので、このラベルは「消
化試合志向」でよいのではないか。

右上の「制度志向」について、これは評価制度の拡張や手続きの公式的な整備
を言い当てていると思われるのだが、「制度」にはインフォーマルなものもあり、
その場合は「平等主義」と重なりが生じるので、これと対比させる意味でも「制
度整備志向」と呼んではどうか。

右下の「平等主義」は「成果志向」を持つというが、日常語だと「成果」にう
るさいのはヒエラルキー組織の上層部か、市場競争のプレイヤーである。「平等
主義」は参加・対話・プロセス志向だから、「成果」というラベルは誤解を招き
そうである¹⁷⁾。むしろ、政策評価のあるべき姿を最もまじめに、そして純粋に考え
るタイプに該当するのではないか。純粋なので妥協は苦手で、分派化しやすい、
という面でも意味がよく重なる。これは「純粋志向」と呼べる。

最後に、左下は「手法志向」とされているが、個人主義による「競争」の領域
では「勝利」という“結果”が重視される。ではなぜ「手法志向」なのか。筆者
の推測だが、「競争」モードの評価言説は効率性と節約を重視しており、それに
役立つ評価手法を偏重しやすいのであろう。とすれば、ここは批判含意で「節約
志向」と呼ぶほうがよい。

かようにラベルを勝手に付けかえたうえで、南島がさらに進める考察を追って

16) 官僚制組織だとインフォーマルな制度はヒエラルキーを中和しようとするので、成員
同士が対等に接しようと努めれば「平等主義」的になる。
17) こうも食い違う言葉を使うのは、もしかすると、政策評価論にいう「成果」は、社会
的効果を含んだ「アウトカム」として、活動の結果である直接的な産出（物）であるア
ウトプットと対比されるからだろうか。

いこう。南島の主な関心は各類型そのものではなく、それらの「ハイブリッド」（となって行われるコントロール方法）に向けられている。

日本の実務的な評価論では、右下（純粹志向）と左上（消化試合志向）が鏡像のように一対の関係にあって、右下のボトムアップ的な評価の推奨と、「逆に強制的な手続き」（p.288）でしかないような左上の理解との対立関係がみられるという。評価論にはそうした言説がほとんどであり、ゆえに政策評価の「改革前衛集団によるセクト化が不可避とな」り、現場との「相互不信…が募」っている（p.288）。

これとは別に、アカデミックな評価論では、右上（法整備志向）左下（節約志向）が同様な緊張関係にある。「この二つのミラー・イメージ」の交差点で「行政実務と学問研究」の架橋が図られそうなものだが、そうはならない。実務派は学問に追従するか、学問派の「難しいレトリック」や「空理空論」に反発して学術的見解を排斥し、学問派は「実務コンプレックス」から「実務経験を鵜呑みにしたり」、逆に実務者との「対話を遮蔽したりするような反応」が生じたりしている。そうしたお互いの「不毛なマウンティング」で、架橋の図れる状態ではないのだという（pp.288-9）。

かように行き詰るなか、「自己評価」を形骸化させないことが肝要である。「政策評価制度は府省の自己評価を駆動源として」いるので、評価の「反映」先を「喪失」させないように、「制度運用の健全化」を図らねばならない。その「制御」のために、研究者は、政策評価の個別的な「現場で何が行われているのか」をまずよく知り、右下（純粹志向）における「発話」を実務者が受け入れてくれる（ようになる）素地をつくるべきなのだ。学術的な「発話」は、「行政の内情を知っている経験者やこれに近い者が、行政に対して行う場合にかぎって許されるもの」（p.290）¹⁹⁾なのだから。

現場で活躍する研究者の本音が語られているようで興味深いが、それが具体的にどのような語り方や信念を提示し合っているのかは示されておらず、評価研究

18) フッドがこれを「ミラー・イメージ」と呼んでおり、南島はそのままカタカナで用いている。

19) ここでいう「許される」とは実務者が（拒否せずに）聞いてくれるという意味であり、理論の精度や道義的な観点を考慮しているようではない。

者でなければわからない。そのためなのかもしれないが、研究者と実務者の（世界観の）みっともない対立になぜ「文化理論」が有益なのか、筆者もわからない。

フッドならば行政の在り方をめぐるな整理の枠組みを問題視して、行政（から）のコントロール手法の捉え方を諸学説の同時代的・通史的に整理する枠組みになっていたが、南島においては言説自体よりも「アクター」の存在が目立っている。南島は、政策評価の意義をめぐる四種類の「アクター」の「言説」を比較すると述べているものの、²⁰⁾ 実際にはその「発話者」集団を先に分類している。「自己評価」をさせられる職員、評価（推進）部門の職員、経営コンサルタント、評価研究者、という四つであるが、これらは何を基準に分類ないし特定したのであろうか。

(2) 2020b

次に、原発再稼働の「実施過程」に注目した論文（2020b）を取り上げる。東日本大震災後の原発再稼働を国が決定するが、原発立地自治体で地元同意プロセスが進まなければ再稼働は「実施」できない。新潟県（柏崎刈羽原発）を事例に、合意形成の主なアクターを事業者（東電など）、行政、周辺住民、専門家たちの四つに分け、この四種の問題構成の違いをまたぐコミュニケーションがとられていないと南島は厳しく批判する。なかでも、「市民」の深層的価値を「政府」に「フィードバック」する「ループが十分に機能していない」（2020b: 108）ことを南島は重視している。言い換えると、「政府」は「市民」からの「不安」をフィードバックとして受け取るべきだったのに、各アクターの文化的な違いに政府は対応する準備ができていなかったことがいけないのである。

ここでもフッドの四類型を参考に四つのアクターが整理され、同論文の順番通りで並べると、「市民」（左上, Fatalist）、「専門家」（右下, Egalitarian）、「事業者」（左下, Individualist）、「政府」（右上, Hierarchist）となっている。ただしこれも、正確には、各アクターが発する「言説」の、そこに表れる「信条体系を抽出」し

20) 南島（2020a: ii）は「本書では、政策評価をめぐる四つの発話主体を識別し、それらの織り成す言説空間を描き出そうとしている」、「制度運用の理論と呼ぶ道具立てで分析する」と述べているのだが、この意味が筆者には把握できない。前掲注4の窪田（2021: 225）も同じところを引いて、「制度運用の理論についても説明不足の点が残る」と指摘している。

たものを分類したという (p.96)。それぞれに重視される価値は、順に、「社会的妥当性」、「科学的専門性」、「経済的合理性」、「政治的正統性」と名づけられている。これはそれぞれの「信条体系」の特徴を言い当てている（と思われる）ので、以下では各「信条体系」の簡便なラベルとして扱う。²¹⁾

この論文でも、各類型で重視される「信条体系」の特徴が適切に表現されているのかが（表面的ながら）まずは気になる。違和感の大きいものが、運命論（左上）にあたる、「市民」という類型である。主体的な市民は原発に反対したり慎重になったりしそうなものだが、南島は市民を運命に身を委ねる消極的な存在とみている。南島が敢えてそう呼ぶのは、再稼働可否のケースでは、周辺住民が事故発生時に被る避けられない被害を訴えていたからであろう。²²⁾

ただ、そうとしても、運命論者が「社会的妥当性」を重視するとはどういう意味なのだろうか。南島はこれを「無関心圏」で説明する。人は関心を持たないものには指示に従って行動する、というバーナードの現実的な概念のことであるが、原発再稼働に積極的に反対した一部の市民は「上位権威のフィクションについて、明確な不信感を募らせている」(pp.98-99)という状態にある。おそらく、無関心圏が崩れ去ったのは、上位権威（者）が社会的に妥当な振る舞いをしなかったからなのであろう。

市民は「福島第一原子力発電所の事故」を踏まえて、「災害の想定や避難計画についての不備が目立つ」状態のままで国が再稼働を決めたことに強い不安を抱いた。南島はこれを「十分な妥当性を欠いたままの状態」と解し、市民の「不安」は疑心暗鬼を生む。その蓄積は、やがて原子力行政への不信として顕在化し、ときに「敵対的な司法・政治闘争に転化する」(pp.98-99)に至ったのだとみる。

この解釈だと、社会的な妥当性とは、人々が関心を持たずにいることだ、という意味になりそうで、これは無理であろう。そこで、「社会的妥当性」と書かれていることは、「暗黙的信頼」というくらいの意味だったのではないかと思われる。

21) 「ラベル」とみなしたのはもちろん筆者である。南島の真意とは異なるかもしれないのだが、「信条体系」と「〇〇性」が筆者には結びつかないためである。

22) ただし、筆者によるこの解釈は「言説」からの分類である（アクターではなく）。

次に疑問なのが、政府が重視する価値とされる「政治的正統性」である。南島はヒエラルキ的文化「のよって立つ信条体系」が「政治的正統性」であるとあっさり断定し、「政治的正統性を具体的に担保するのは選挙である」(p.104)と続ける。ただ、「もっと直截的にいえば、政府は政治的正統性の不安定化を嫌う行動原理に基づく存在である」とも書かれているので、南島の言う「政治的正統性」は“支配権力(体制)の安定”を意味しているようである。

論文はこの直後、近年の選挙結果を振り返り、全国レベルでは2009年以後の総選挙において、各地の地方選では2012～2016年において、「脱原発」の争点化は失敗しており、投票は、無関心圏からはみ出してしまった原子力行政を問い直す政治的な「回路」としては「有効なものとはならなかった」(p.105)という。新潟県では、知事選挙(2016年)が「再稼働の是非」をめぐる一騎打ちとなり、非自民系の知事が初めて当選したものの、彼はスキャンダルで辞任、2018年の知事選では再稼働に慎重姿勢を示した保守系候補が僅差で当選した(pp.105-6)。そのため再稼働の争点は政治的回路から消えてしまったようである(南島はなぜか明示していない)。

こうした政治動向の経緯を紹介すると、次には唐突に「もう一つの論点」が提示される。再稼働を判断するのは原子力規制委員会なのか、中央政府なのか、立地自治体なのか、というものである。政府はこれを曖昧にしていたが、規制委員会の判断を「尊重する」と中央政府が述べてきたので、最終的な判断を負うのは「立地自治体」であろう、と南島は推定する。ところが政治的正統性の記述はこれでおわってしまうのである。

真意がよくわからないのだが、南島は、「脱原発」的な声が「政策デザイン側にフィードバック」(p.108)できなかったことを問題視している²³⁾ので、一連の選挙で政府は(国でも県でも)原発再稼働の決定に対する政治的正統性を得られていない、ところが政府はそれに気づいていない、と南島は主張しているのであろう。気づいているから政府は認めたくのないかもしれないが、いずれにせよ、そうした政府が重視するのは“支配権の維持”であり、政治的正統性とは切り離し

23) 再稼働の地元同意において「市民」が「司法権や選挙などの政治過程への回路」に「接近」したのは、「じつはフィードバックの回路の模索である可能性があるという点でここでは指摘しておきたい」(p.108)とまで強調されている。

たほうがよい。

あとの二つのラベルはまだ了解可能である。しかし、原発事業者の価値観は個人主義的というよりは国家主義的かもしれないし、科学的専門家が低グリッド・高グループに収まるとも思えないのだが（原子力ムラの成員なら帰属先に忠実ではあろうがグリッドも高いし、それ以外の科学者集団は合意形成過程に影響力を持っていない）、それはグリッド・グループ分析それ自体の是非に関わるべき論点である²⁴⁾。

南島の入組んだ説明を受け止めるために、ここまでを（筆者の再解釈を含めて）図表5にまとめる。

図表5 再稼働合意における南島の四類型化されたアクターと信条の特徴
（修正的要約）

		グループ	
		低	高
グリッド	高	運命論 アクター：「市民」 信念的価値：暗黙の安心	ヒエラルキー アクター：「政府」 信念的価値：支配権の維持
	低	個人主義 アクター：「事業者」 信念的価値：「経済合理性」	平等主義 アクター：「専門家」 信念的価値：「科学的専門性」

出典：南島（2020b）をもとに筆者作成。

南島論文は「市民」の非主体的要因を重視しており、動かすにしても止め続けるにしても原発が彼らの人生に与える影響はあまりに大きく、周辺住民の抗議や陳情がたしかに運命論的になる（それは当時の報道でわかる）ことを考慮すると、「文化理論」はたしかにその文脈と適合する²⁵⁾。

とはいえ、不安を抱いた市民のうち再稼働に公然と意見する一部の市民と、それ以外の多数の不安な市民との違いをどう取り扱うつもりなのだろうか。市民にも少なくとも二種類の「言説」があることを前提にするなら、その場合は運動のクレイムかレトリックの戦略を分析しないと実像が見えてこない（おそらくそれは南島の関心ではないのだが）。

24) Bardach（1999）は、「個人主義」とされる市場・競争が現実にはヒエラルキー的に組織化されているなど、現実と乖離した前提を明確に批判している。
25) Wildavsky は個人主義 vs.官僚制的組織という社会科学の二元論的前提に、運命論とセクトの二つの世界観を「発見」して整合的に加えたことを、文化理論の大きな理論的貢献と考えている（CT および Wildavsky, 1991）。

加えて、ここでも何に対するコントロール（のモード）を問題にしていたのがわからない。南島はリスク・コミュニケーションを重視しているから、本来は、人々を左上から左下の領域へと誘いたいはずである。²⁶⁾他方で、電力会社や政府は、主観的な不安を傾聴して一般的な信頼を回復させ、人々を再び「無関心圏」へと戻して指示どおりに操作しようとする、という「運命論」的な社会管理を期待するかもしれず、南島の批判とは皮肉にもこちらのほうが相性がよいかもしれないのである。²⁷⁾

(3) 二論文をあわせて

南島による文化理論の応用は、アクターと言説がどうにかして組み合わせた独特の発想に基づいており、フッドやウィルダフスキーの捉え方からスムーズに考えを進められるものではなかった。ダグラス風に期待するなら、集団組織が共有しかつ集団内を統制する世界観（しかも、それは外部の自然界と一体化した捉え方なのである）が必要だが、その意図はないようだった。南島は先行研究から自覚的に飛躍したことを論じているのだろうが、先行研究と独自の構想の理論的なつながりが不明確なので——独自語法の多用から難渋になり、伝え損ねているのだとしても——どの程度までグリッド・グループ分析に依拠していたのかも判断し難い。政策過程論的な関心でいえば、どちらのテーマも、誰の誰に対するコントロールを分析対象としているのか、そもそも言説は事態をコントロールするものなのか、といったことも論じておくべきであった。

せめて、アクターと言説をどう一体化しているのかが明らかになれば、独自の理論的貢献が捉えやすくなると思われるが、そうとしても、それには、アクター

26) リスク・コミュニケーションは、人々がリスクとメリットの均衡を再考し、自身の選択可能性を増やそうとするから、市民を運命論から脱却させ、「個人主義」的文脈に近づけようとする考え方である。もっとも、実践的には運営者との信頼関係育成を重視するので、その点では「平等主義」を連想されるかもしれないが、分裂しがちな組織に危機管理は不可能であり、実際、彼らは当該危機の拒否を志向する。

27) NSでは、与えられた指示に従うか従わないかしかしないような言語メッセージによる教育が「運命論」と深く関わり、社会の民主化には、子供がただ命令に従うのではなく、自己と他者の関係を想像して判断するように促すような教育（の言語使用）の必要を力説している。すなわち、Bernstein (1965) のいう「restricted code」（前者に該当）、「elaborated code」（後者に該当）の言語体系による教育のことである。

を組織体レベルで設定し、集団と個人の関係を捨象していることの適切性も検討しておくべきである。行政学だと組織体レベルでの分析が一般的だが、グリッド・グループ分析は、集団と個人の相互関係を問題にしている。組織文化に対する関心は行政学においても強いので、方法論的により踏み込んだ議論が望まれる。²⁸⁾

ここまで多くの疑問を投げかけてきたが、それはグリッド・グループ分析自体の曖昧さにも原因がある。そこで、次節では半世紀遡って、ダグラスの NS に立ち戻ってみよう。

5 ダグラスに戻って

グリッド・グループ分析が提唱されたのは 1970 年公刊の *Natural Symbols* においてであった（邦訳『象徴としての身体』）。ダグラスは四分表からではなく、右下（低グリッド、高グループ）と左上（高グリッド、低グループ）の直感的にわかりづらいタイプから説明を始めている。

グループ性のみ（すなわち低グリッド・高グループ）の場合、「人はある社会集団に対してひじょうに強い忠誠心を認めるが、同時にどのようにして他の構成員と結びついたらいいとか、自分は何を期待すべきかがわからない」（訳 9 頁）。グリッドは、成員にとるべき行動を指示するのだが、それが弱いとは、組織内の分業や地位・役割がないか曖昧なことを意味する。²⁹⁾

グリッドの例として、ダグラスが挙げているのと似た（もっと簡単な）もの例を挙げると、我々には親戚や友人がいろいろな人間関係があるが、なにかあれば真っ先に助けてあげなければいけない人、ほどほどでいいが助けに行くべき人、実質的には無視してもいい人、といった区分があろう。周囲からの圧力はあろうが、低グループな社会組織には強制を伴った帰属集団がないので、付き合いの程

28) 組織レベルへの積極的な応用は Coyle (1997) の提唱が知られており、伊藤 (1999) もこれに言及しつつ組織レベルへの応用に期待を持っていたが、踏み込んだ考察は示されていなかった。

29) 我々は日常的に社会的役割を通して他の人々と接触して共同的に行為しているから、グリッドがないと、他の成員に対してどのように振舞えばいいのかわからなくなろう。たとえば生徒と教師が学校外で遭遇したら一人の素の人間として互いに接すべきなのであれば、お互いに非常に困るであろう (cf. Goffman, 1959)。

度をどうするかは本人にとっての関係性で区別されている。強く制約される関係性なら高グリッド、それが弱いなら低グリッド、³⁰⁾ という意味である。

次が、グリッドのみ強力な場合である（つまり低グループ）。そこでは、「人はどんな社会集団からも自由で」（訳 11 頁）、人は何かの集団に参加しているとも考えていないのだが、他者との関係は強くあり、人は「お互い同士の取引に従事するさいの一連の規則に束縛され」ている（訳 11 頁）。したがって、極端にグループ性が低い形態でも、天涯孤独のような状態ではなさそうである。

ではここで四分類に戻る。それは、図表 2 よりあっさりしたもので、NS の 4 章に「グリッドとグループ (a)」という見出しつきで登場する (p. 59, Figure 5, 訳 117 頁)。左上（グリッドのみ高）に A、左下は B、右上に C、右下（グループのみ高）³¹⁾ は D と記号を付しているが、それ以上のラベルはない。図表 6 がその図である。

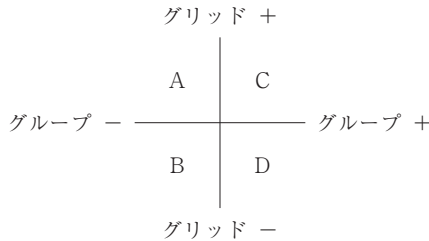
B（低グリッド、低グループ）の人々は明確な集団に帰属しないだけでなく、他者との関係から受ける行動の制約も弱いので、人間関係は「取捨選択的」(optional mode) になり、因襲に悩まされることもない。成員に与えられる役割は（他の類型と比べて）最も小さく、B の個人は制約が少なく個人の判断で行動しやすいから、この社会では、人は何事においても主体的に判断して行動するべき、という考え方が優勢となる。

C（高グリッド、高グループ）では「さまざまな種類のグリッドやグループが複雑に交錯して」、より高次に組織化されている (pp. 59-60, 訳 120 頁)。C では、A よりも付き合いの幅が圧倒的に広く複雑なので、帰属集団が成員個々に役割を与

30) 序文で「グリッドとは、一人の人間が、自己を中心とする基盤に立って他者と関係づける法則を指す」（訳 9 頁）と訳されているが筆者には「自己を中心とする基盤に立って」の意味が取れなかった。原文は「ego-centred basis」(p. vii) で、自分が関りがあると思っている関係性に拘束されるというくらいの意味ではないかと思われる。同じことが IV 章では「自分自身との関係において決定される一定の範疇によって、他の人びととの関係を拘束されている (he is constrained in his relations with other people by a set of categories defined with reference to himself) と言い換えられており (p. 59, 訳 120 頁)、このカテゴリーとは例えば家族（内の役割配分）のことであり、この拘束・指示は組織に対してではなく成員それぞれに対する義務感を伴うところがグループとの違いであろう。

31) 先ほどは省いたが、Douglas ed. (1982) では左下が A で、右回りに B, C, D と付されている。

図表 6 原書 4 章のシンプルな図



出典：NS: 59

え、全体がよくまとまるような社会組織が形成されている。そのため、些細な違反でも社会秩序を揺るがす事態につながりかねないと（過大に）非難され、制裁を受けやすい。

A と D は（B と C に比べると）まだ直感的にわかりづらいので、もう少し補足しておく。

① A の補足

ダグラスの想定では、この人々は、「人口がまばらで社会的諸関係も少なく、それが中断されたり不規則だったりするところ」で暮らしている。そこでは、他者からの影響よりも、「旱魃、牧草、家畜、獲物の移動、疫病、あるいは穀物の成長といった」自然界からの影響をはるかに大きく受けており、彼らはそれを「運命」と考えている（p. 60, 訳 121 頁）。

人間たちは、彼らを支配する事物（自然界）のもとで「ともに苦し」み、「同じ犠牲をはらっている」。そこに暮らす人々は、人間同士（fellow men）の、「平和的で寛容で温和な（benign）コスモロジー」を共有している（p. 61, 訳 122 頁）。彼らは人以外の存在（non-human beings）から大きな影響を被って暮らしているので、自然に対して人間相手と同じようなコミュニケーションをとろうとは思わ³²⁾ないが、物の世界と人間の世界が無関係だとも思っていない。運命は「魔力、幸運、星の影響」といったさまざまな呪術と結びついており、自然（物の世界）が自分

32) 呪術は行われるが、人間でない存在と交流するための儀式を洗練させると必要は乏しく、よって込み入った儀式はつくられにくい（NS：60-61）。

たちに影響を及ぼすその力をうまく利用したいと思っている。人間は宇宙を調節することはできない (not regulative) けれども、「勇気と決断力と抜け目なさ」といった「個人的資質 (personal endowment)」をもった者なら、宇宙を支配するその力をうまく操作でき (manipulable), そうして (まれにはあるが) 人生を成功させること (立身出世) ができる (p.104, 訳 189 頁)。

ただし、そうした優れた資質をどうして身につけられたのか、という合理的な説明はなされない。その資質や特権に恵まれないという配分の不公平さに多くの人は気づいているが、本質的に世界は穏やかで恵み深く (benign), 宇宙の力を利用する能力の不公平に道徳的な意味はないと考えている (p.104, 訳 189 頁)。しかし、成功者と多数の従属者のあいだでこうした世界像を共有できなくなると (言い換えると、一部の成功者が不当な手段で富や地位を獲得していると思うようになると)、世界は本来あるべき姿から逸脱してまわっていると感じられ、間違った現世の破滅とその後のユートピア到来を (現実逃避的に) 強く期待するようになるという。

しかしこの社会には、乏しい運命に服従する多くの人と、ごく一部で運命を呼び込んで成功する人、という対照的な二種類の人生観が同居している。彼らは世界観を共有しているが人生観は対照的である。NS は A と B の連続性を強調した書き方をしており (後述)、A における稀な成功者の人生観は B に近いとダグラスも述べている。

② D の補足

次は、高グループ・低グリッドという不思議な集団についてである。そこでは、はっきりした境界を持つ集団の成員でありながら、帰属集団から義務を負わされたり一定の行動を強いられたりすることが (ほとんど) ない。集団内の役割分担も、他の成員との関係づけもほとんど行われない。言い換えると、成員間を秩序づけるルールがないので、成員同士は対等であり、集団内の資源配分も平等になされる。こうした生活様式から、成員はどこでも自身が対等に扱われることを期待し、そうでない事態には強い非難を向けようになる。

グリッドが低いとは緊密な組織化がなされていないということであるから、集団組織内の差異を調整する仕組みがなく、組織の維持はリーダーに依存し、リーダーと一般メンバー (followers) に二層化する。一般成員は平等なのだが、リーダーは別格の存在となりがちである。

この集団は内部調整機能に欠けるため崩壊しやすく、集団の結束を高めるために外部との区別や影響に大きな注意を払っており、善いものは集団内にあって、外の邪悪なものと戦うという二元論的な世界観をつくりやすい。特に成員が不安を感じている状況では、邪悪なものが（神聖なる）内部に汚染をもたらしていると理解されており、異物を見つけ出して集団を浄化することで正常な世界を取り戻そうとする。しかし何が汚染物であるかは不明確でイデオロギ的に定義されやすく、そうして名指しされた異物・汚物に対する敵意が昂進し、集団は魔女狩り状態に陥りやすい。

ダグラスには魔女狩りを防ごうとする問題意識が強く、魔女狩りの起こった部族の諸事例が高グループ・低グリッドの社会構造を持っていることを複数指摘してから、西洋文明社会においてもマッカーシーの魔女狩り（赤狩り）を経験したばかりであると警鐘を鳴らしている。魔女狩り的事件を防ぐには（グリッドとグループで分析される）社会構造を変える必要がある、とも述べられている（訳 20 頁）。

このように、D の領域（sectarian）の叙述には負の側面が目立っている。この特徴は過激派や怪しげな新興宗教の理解には適しているが、「平等主義（egalitarian）」といえは我々には民主的で肯定的なイメージがあるので、それとはうまく結びつかない概念となっている。

おまけに、この「平等主義」の想定には、実際にはどのように資源配分されるか、上下関係を回避するどんな努力をしているのか、といった現実的な観点は無い。極端なタイプの描写であるとはいえ、設立と同時にそのような悪循環に陥るものだろうか。よほどの小集団が多く連立して火種を抱えながら設立した組織体なら想像できなくもないが、初めからお互いにつながる手がかりがなく混沌としており、誰かを告発して排除することに熱をあげる集団というのは現実的に思えない。

以上で、グリッド概念の意義は把握しやすくなってきたのではなかろうか。B と C のタイプを NS はほとんど説明していない。C は文化人類学では普通の理解だったのでダグラスは取り上げなかったのだが、B は A との関連で中間的に示されるだけで、区別がしづらかったようである。VII 章の四類型の表（コスモロジーに関わる）中で、B の領域内に「温和な、構造のないコスモス；非呪術的、

凝縮性の弱い象徴、個人的宗教」と書き込まれているが (p. 150, 訳 190 頁)、本文でそれに相当するのは、B 領域というよりも、A と B の中間的な領域である。しかも、B は産業社会においてはほとんどユートピア的な姿として描かれている。ダグラスは同じ意味ながら別の図を使って、次のように述べている。ヒエラルキー的社会を生きる人々が、温和で構造のないコスモスで一切の人付き合いから解放されて生きることに強く惹かれて、日常の社会生活から「転落」したくなる先が B なのである。

その図は同じ関係を一次方程式のグラフのように描かれている。³³⁾ 本稿の図表 7 のように、縦軸に「グリッド」がゼロから最大値へと伸び、横軸に「グループ」が同じくゼロから最大値まで伸びている。そして、両者の均衡点が右に 45 度の点線で記されている。産業社会の組織的経験はこの 45 度線の上に位置するので、そこから、グリッドもグループもゼロのところへと「転落」したい、という誘惑が我々に働きうる。B の領域はそんな憧れの「転落」先なのである。

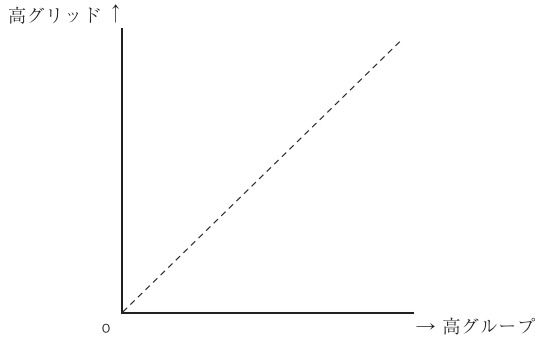
この文脈では、B の領域 (図表 6) はフッドやウィルダフスキーの「競争」的・「個人主義」とは印象があまりにも違う。「競争」・「個人主義」の社会組織は、NS だと A と B の交錯帯域に相当している。

ところが、1982 年のダグラスは、低グリッド・低グループの社会組織に「個人主義」というラベルを当てている。³⁴⁾ 四類型ではグリッドもグループも下がるほど個人主義的になるはずだが、もう一つの図 (図表 7) を見ながら考えると、低グリッド・低グループの究極の姿が自然資源を貪欲に開発するタフ・ニゴシエイターなのか、それとも宮仕えにうんざりして独りラーメン屋を始める中年サラリーマンなのか、筆者にはよくわからなくなってくる。「脱サラ」の飲食店が厳しい市場競争に晒されることは間違いないが、彼らは金銭的成功を夢見て開業するわけではない。しかも、高度に組織化された社会から「転落」する「誘惑」という観点は、その後の文化理論にも出てこない。

33) グリッドとグループの図表は四章で二通りの形態で提示されている。グリッドの高低 (+, -) とグループの高低 (+, -) で組み合わせた四類型の図には「grid and group (a)」, もう一つの 45 度線の図には「grid and group (b)」の見出しがついている。

34) ほかの三つも含めて、記憶の助けになるようにという David Ostrander の提案だという (Douglas, 1982: 4)。

図表 7 A 領域と B 領域の連続性を示す図



出典：NS: 60, 訳 120 頁の図 6。ただし、原図には縦軸上端に「A」、横軸右端に「B」と付記されており、B 記号は意味が異なり紛らわしいのでどちらも削除した。

以上、NS に遡ってみることで、謎の多かった「運命論」の概念的背景が確認できた。低グループは明確な集団を形成するには人口密度が低いくらいの社会が想定されていた。主たる人間関係の境界は曖昧なので、そこにお互いを規制する人間関係があれば高グリッド・低グループの運命論型となるが、それでも高グリッド・高グループの社会集団よりは制約が少ない。

とすると、ヒエラルキー型のほうが、与えられた運命を受け入れるしかなさそうな社会に見えないだろうか。これは運命の意味合いに左右されるだろう。高グリッド・低グループの運命性とは自然界の気まぐれを含めての「運命」であり、いちどあるところに生まれたがゆえにそこから抜け出せない（カースト制度のような）「運命」ではない。不確実であることの魅力が「運命論」には共有されているからこそ、もしある社会組織でグリッド下がっていけば、そこではポジティブで楽観的な「個人主義」が優位になっていくのである（もちろん逆も起こりうるが）。

NS ではこの流動性を看取できるが、四類型の左上を「Atomized subordination」（原子化状態での服従）、右上を「Ascribed hierarchy」（生得的に決められた階級制）と呼ぶと、運命論なら荒野でただ一人生きねばならぬような、ヒエラルキーなら脱出不能のカースト制度に組み込まれた印象を与えてしまう。これでは社会構造の変化によってその人の暮らす文化も変化するという重要な含意も失われる。ラベルをつけるのは考えものである。

6 まとめと示唆

政策研究におけるグリッド・グループ分析は、90年代後半のフッドによる行政管理諸言説の批判的整理という応用を契機として、日本でもしばらくは注目を受けた。グリッドとグループの概念が実際にどう違うのか、この二次元の四類型ながら高グリッド・低グループの実例が乏しいこと、ウィルダフスキーが「個人主義」（低グリッド・低グループ）を好み「平等主義」（低グリッド・高グループ）の台頭に否定的な価値観を持っていたことなども指摘され、日本での紹介も批判的なスタンスをとっていた。政治文化や行政の組織文化への展開が期待が示されつつも、それほど期待されていたようではなく、その後の発展もなかった。

例外的な取組が南島の二論文で、*CT*の構成主義にフッド以上に注目して、政策評価の運営体制や、原発再稼働の地元合意形成における主張の噛み合わなさを分析した。しかし高グリッド・低グループ（運命論）と低グリッド・高グループ（平等主義）の社会組織の捉え方がダグラスの想定から乖離してしまうなど、理論的に無理のある応用となっていた。南島では先行研究との概念的な相違などの理論的説明が不足していたものの、その理論的な弱点はグリッド・グループというもとの概念にも原因がある。

本稿はグリッド概念のわかりにくさに問題があると考え、そもそも集団性が低いのにグリッドが高くなるのはどうしてなのか、高い忠誠を求める集団なのに成員が自律的で分業や役割を割当てることなく組織が成り立つのか、というごく基本的な疑問に立ち返った。*NS*によると、グリッドが低いとその集団内で個人は（自身で自律的に行為することから）他の成員とのつながり方もわからず、何事も流動的に交渉しなければならず、組織を維持することが内在的に難しくなっていた。また、グループは成員の人口の集散状態に関わる概念化であり、ほとんど単独生活ができるくらいに人口がまばらであれば、我々が現代的とみなす「個人主義」的な文化が、非産業社会の部族集団においても成立するという。そして同様に、ヒエラルキー的社会組織には成員の規模が大きく、そのため彼らが帰属する複数の集団にまたがったグリッドを緻密に調整する必要がある、それが高度な（そして個人には不自由な）ヒエラルキー的構造で集団を組織させることになる、

と考えられていた。

ダグラスが小さな規模の部族集団を想定していた分析をウィルダフスキーらが一般化したことの無理も表れているように、概ね 21 世紀の政策学的関心で時折取り上げられるグリッド・グループ分析には、グループの凝集性とは無関係に成員同士のかかわり方がどう規定されるのかという、グリッドに対する関心は低かった。

グリッドは個人に課される行動の制約的な指示であるだけでなく、既に我々になぜか与えられてしまっている社会的役割が、その集団でどのような世界観・宇宙観に基づいているのか、また、そのような価値世界が日常の社会生活のどのような規制から強化されているのか、という相互作用に関心を持った概念でもある。しかし、CT 以後のグリッド・グループ分析においては、政府のコントロールと関連付けられる際は特に、個々人レベルにある行動を強制して一定のイデオロギイ的価値体系を維持することに我々の注意が偏り、フッドやウィルダフスキーの読者たる我々には、行為の指示が共通の世界を成員間に生成させるという人間関係の両義性を重視しなくなっていたように思われる。

本稿のこうした捉え方は、グリッドを社会的役割というより一般的な社会学概念に引き寄せすぎているのだろうか。社会的役割の割当てに注目するなら、我々は次に、個々人が実際にはその役割と距離を置いて儀礼的に行為しているというゴフマンの観察³⁵⁾を考慮に入れるべきである。社会的行為は一定の共通理解を必要としており、そこではコミュニケーションの内容よりも形式性が重要な意味を帯びる。グリッドの低い社会では秩序の目は粗くなって各人の戦略的行為の選択幅が広がり、たまたま訪れる好機を積極的に活用する少数者とそうでない多数者は世界観をどうにか共有しつつも、その下での人生観は対照的になる。NS では、低グループの社会において運命論風の諦めた生き方になるか、個人主義的な立身出世をめざす生き方になるかは、個人の力量や姿勢によっても異なっていた（四類型より図表 7 の視覚化を想起されたい）。グリッドすなわち服従という意味ではなかったのだし、グリッドもグループも低い社会とは、密に組織された集団成員に墮落の誘惑を感じさせるような社会的文脈でもあり、競争的な「個人主義」の世界でもありうるのであった。しかしこうした複雑な性格は、後の議論には反映さ

35) NS でも Goffman (1959) との差異が（一か所で）言及されている。

れず、20 世紀末以後の社会科学では四つのラベルの与える印象が先行して、既存の社会集団や組織体をどこにあてはめようかと考えがちである。

時代を経て、また応用される対象が異なるにつれて、概念が変化するのは当然であるし、元の概念のほうが正しいというわけでもないのだが、早い時期から混乱を招いた議論なら、オリジナルに戻って考えてみるほうがよい。そうして、グリッドの低さに注意することがこれからの公共政策の構想や実施にどのような意義を持ちうるのか、という観点から、グリッド・グループ分析のこれからの意義が検討されるべきである。

そういうと風呂敷が大きくなりすぎるので、さしあたって筆者が気になることとして、試みに、今後のデジタル化と人口減少社会のありように言及してみたい。一般に人口減少とデジタル化は、手を取りあって人間関係を希薄化し、対人接触を通じたその再形成も難しくするだろうが、そうすることで人間関係の狭隘化に対応していく術ともなるだろう。政策的関心はたいていグループの保持や再生を強く意識しているが、これらによって社会のグリッドがどうなりそうなのかはあまり議論がない。

行政活動のデジタル化が進めば、我々の日常生活は集団性だけでなくグリッドも低下していく、とまずは予想されよう。集団性の低下はリーダーに認識されやすいし、弱者には保護を得られなくなる不安が生じるので、政策はそれに対応して構想されるであろう。それがうまくいくかどうかは別として、我々は既存の集団形態を念頭に望ましい社会を暗に想像しているであろう。しかし、集団の境界性・凝集性とは別に個々人を規制するグリッドの作用は意識されないので、社会は低グリッド・高グループという不安定な方向に向かうものと予想される。たとえば、スマホや SNS の日常化は、サービス提供企業の思惑とは別に、利用者同士の疑似的な一体感を高めるとともに些細な振る舞いの相互監視を強め、子供たちや若者の“LINE 地獄”や SNS のトラブルから生じるいじめや暴行事件が深刻な問題となっているように、人を自由にするどころかグリッドをむしろ高めてもいる。

さらに、ウェアラブル端末や生体認証技術によって我々の行動や思考や嗜好は観察され続けデータ蓄積が進むため、SNS 的相互監視とは別に、企業や政府などの操作が我々個々に直に作用してくる。何が起きているかを把握できていれば少々の対処もできようが、そのような「個人主義」的な世界を GAFAM の資本

主義は許さない。³⁶⁾ マーケティングの心理学と政府の行動経済学的施策の精度向上で、我々は個別最適に企業や政府からの多様なコントロールに（無自覚的に）晒されるようになるだろう。この社会は高グリッド・低グループの性格を強めるものと思われる。ちょうど米国の経済リバータリアンが社会的弱者を行政サービスの対象から外して搾取的ビジネスを拡大させてきたように、我々の大半は「運命論」に追いやられかねない。³⁷⁾

もっとも、政治が集団性を重視するという経験則からは、デジタル監視体制の確立から帰属集団への忠誠心を強化する政策が優先されるとも想像でき、とすればそこは高グリッド・高グループの、まさにディストピア小説の世界となる。

いずれにしても実際にそれほど緻密な管理は徹底できないし、「自己責任」で人々を打ち捨てておくにも限界があるから、それほど悲惨な将来を思い描こうというのではない。いずれを想像するかで、政府の採るべき政策も、また市民が政府を統制すべき方向性も異なってくる、ということが重要なのである。³⁸⁾

こうした社会の技術的変化に対する我々の反応にはまさにリスク認識の差異が反映されるので、RCに回帰した議論が増えてくるかもしれない。しかしそれだけでは表面的なことである。我々にはグリッド概念を背景から見つめ直し、これからの政府はどのような社会を管理し、どのような社会管理を我々は政府に期待するのか、という議論に一定のかたちを与えていく知的努力が求められているのではないか。グリッド・グループ分析は政治・行政学のこれまでの前提とは系譜の異なる発想を持っているので、それを活かした理論的応用を筆者も模索していきたい。

36) 多くの問題提起がなされているが、ここでは「監視資本主義」(Zuboff, 2019)をその代表として挙げておく。

37) 彼らのビジネスが背後にあるとはいえ、日本の教育改革論議も似たような構想に引きずられているようである。これも多くの文献があるが、ここでは特に、低学力層の現実を無視した教育のデジタル化を学習塾の現場から批判した物江（2023）を挙げたい。

38) ここでは触れる余裕がないが、行政管理がどのような社会構想を暗に前提とするかという観点では、Pollitt and Bouckaert（2017）のように、公的ガバナンスを市場、国家、互助の三タイプに分けて、それぞれの長所と短所を整理するのも有用である。ただ、ガバナンス論としては互助にあたる領域の捉え方がグリッド・グループ分析とはまるで異なるので並べて語るわけにいかず、機会を改めて検討したい。

参考文献

- Bardach, E. 1999, "(Book review) The Art of the State", *International Public Management Journal*, 2(2), 389-392.
- Bernstein, B. 1964, "Social class, speech systems and psycho-therapy", *The British Journal of Sociology*, 15(1), 54-64.
- Bernstein, B. 1965, "A Socio-linguistic approach to social learning", J. Gould ed. *Penguin Survey of the Social Sciences*, Penguin.
- Coyle, D. 1997, "A cultural theory of organizations", M. Thompson and R. Ellis eds., *Culture Matters*, Routledge.
- Douglas, M. 1966, *Purity and Danger*, Routledge & Kegan Paul. (塚本利明訳『汚穢と禁忌』ちくま学芸文庫, 2009年。)
- Douglas, M. 1970, *Natural Symbols*. Pantheon Books. (江川徹, 塚本利明, 木下卓訳『象徴としての身体』紀伊國屋書店, 1983年。)
- Douglas, M. 1978, *Cultural Bias*, Royal Anthropological Institute.
- Douglas, M. 2002, "Being fair to Hierarchists", *University of Pennsylvania Law Review*, 151, 1349-1370.
- Douglas, M. 2003, "Introduction to 1996 edition", *Natural Symbols*, Routledge Classics 2nd, Routledge.
- Douglas, M. ed. 1982, *Essays in Sociology of Perception*, Routledge & Kegan Paul.
- Douglas, M. and A. Wildavsky, 1982, *Risk and Culture*, University of California Press.
- Goffman, E. 1959, *The Presentation of the Self in Everyday Life*, Doubleday. (石黒毅訳『行為と演技』, 誠信書房, 1974年。)
- Hood, C. 1996, "Control over bureaucracy", *Journal of Public Policy*, 15(3), 207-230.
- Hood, C. 2000 [1998], *The Art of the State*, Oxford Press.
- Pollitt, C. and G. Bouckaert, 2017, *Public Management Reform*, 4th, Oxford University Press. (縣公一郎, 稲継裕昭監訳『行政改革の国際比較』ミネルヴァ書房, 2022年。)
- Selle, P. 1991, "Culture and the study of politics", *Scandinavian Political Studies*, 14(2), 94-124.
- Spickard, J. 1989, "A guide to Mary Douglas's three versions of grid/group theory", *Sociological Analysis*, 50(2), 151-170.
- Thompson, M. 1982, "A three-dimensional model", Douglas ed. *Essays in the Sociology of Perception*, Routledge & Kegan Paul.
- Thompson, M., R. Ellis and A. Wildavsky, 1990, *Cultural Theory*, Westview Press.
- Wildavsky, A. 1987, "Choosing preferences by constructing institutions", *The American Political Science Review*, 81(1), 3-22.
- Wildavsky, A. 1991, "What other theory would be expected to answer such profound questions? A reply to Per Selle's critique of cultural theory", *Scandinavian Political Studies*, 14(4), 355-360.
- Wildavsky, A. 1998, *Culture and Social Theory*, edited by S. Chai and B. Swedlow, Routledge.

Zuboff, S. 2019, *The Age of Surveillance Capitalism*, Profile. (野中方香子訳『監視資本主義』東洋経済新報社, 2021 年。)

赤間祐介 1999, 「政治文化論の新展開」『東京学芸大学紀要 第 3 部門 社会科学』50, 125-137。

伊藤正次 1999, 「文化理論」と日本の政治行政研究」『季刊行政管理研究』82, 73-85。

窪田好夫 2021, 「書評 南島和久『政策評価の行政学：制度運用の理論と分析』（晃洋書房, 2020 年）」『年報行政研究』56, 223-226。

高橋克紀 2021 [2019], 『政策実施論の再起動』デザインエッグ。

高橋克紀 2024, 「政策実施論の行政学的文脈に社会理論的観点を取り入れる」『姫路法学』67, 57-85。

田中隆文ほか 2018, 「ボトムアップ的発言を醸し出す場の条件の検討（その 1）」『水利科学』61 (6), 52-75。

南島和久 2020a, 『政策評価の行政学』晃洋書房。

南島和久 2020b, 「政策実施過程の事例とその分析枠組」『神戸学院法学』48 (3・4), 481-510。

西尾隆 2003, 「公務員制度改革と「霞が関文化」」『年報行政研究』38, 22-43。

物江潤 2023, 『デジタル教育という幻想』平凡社。